

大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

■主催者あいさつ

老川祥一（読売新聞グループ本社取締役最高顧問・主筆代理）

たくさんの皆さんにご参集いただきまして、大変ありがたいと思います。全国の現場の先生方、都道府県の教育委員会、中央省庁、受験産業のみなさん、たくさんの関係の方々に加え、一般の参加者の方も来ていただきました。いかにこの問題への関心が高いかを改めて実感をさせられたものです。

今、世界は大変な激動期で、グローバル化もあって、いろんな変化が来ています。経済の分野もそうですが、同時に教育の分野も、大学ランキングがどうだとか言われていますし、海外からの留学生も増えている。逆に、日本の高校生が日本の大学ではなく、直接海外の大学を目指す傾向にもなってきました。教育の分野も、国際競争の一つの分野という状況にきています。

その中で、日本の若い人材をどうやって育てていくのか、日本の将来を担ってもらう人材をどのように教育していくかは、大変大きな課題であると思います。先だつてのリオのオリンピックでは、日本の若者は参加するだけではなく、メダルを取り、大変心強い思いをしました。2020年の東京オリンピック・パラリンピックも楽しみです。

2020年は同時に、教育、大学入試でも大きな転換期になると思います。大学入試のこれまでのセンター試験に代わる新しいテストが実施され、新しい学習指導要領も実施されます。教育にとっても、2020年は節目に来ている感じがします。

大学の入試のあり方が変わっていくということは、同時に高等学校のあり方にも大きな影響を与えるでしょうし、小学校、中学校、初等中等教育にも影響があると思います。そういう意味で、大学入試のあり方について、いろいろ考えていく必要がある。そういう局面にあると思います。

その新しい大学入試の改革としては、思考力あるいは表現力を重視して、論述式の問題を導入するという方向だとうかがっています。すでに各大学では、それに備えているユニークな入試が始まっています。本日のフォーラムは、そういった中心的な取り組みをされている大学の方々からお話をうかがい、各分野の方々に入試をテーマとして、いろいろ話をさせていただくことを通じて、大学入試のあり方、そして今後の人材教育のあり方について考えていく。そういうきっかけにさせていただきたいというのが、本フォーラムの目的であります。

本日のこのフォーラムでは、先進的な大学入試改革に取り組んでこられている大阪大学の西尾学長、国際教養大学の鈴木学長にまずご報告を頂き、オックスフォード大学のアリソン・ビール日本事務所長代表に英国における入学者の選抜についてお話をさせていただきます。そして、ベネッセの藤井さんに海外の大学入試についての取り組みをうかがいます。



大学入試改革フォーラム ～高大接続をテーマに～

そして後半は、日本私立大学連盟会長で早稲田大学の鎌田薫総長、日立製作所の川村元会長、リクルート進学総研の小林所長、全国高等学校長協会会長で都立西高校の宮本校長、国立大学協会理事で北海道大学の山口学長によるパネルディスカッションを予定しています。これだけの顔ぶれがそろうのは極めて異例のことで、有意義なお話が聞けると思います。どうか、皆さんの今後のいろいろな取り組みのご参考にしていただければありがたいと思います。

読売新聞では、こういったことを含めて教育問題に積極的に取り組んでいます。読売KODOMO新聞は小学校高学年対象です。読売中高生新聞もあります。先日も文化庁の調査が出ていましたが、日本語の乱れが話題にされていて、最近はメールのやりとりも文字ではなくて、絵文字が使われるようなことになっています。やはり、言葉を大事にすることが学びの基本だろうと考えております。我々は先ほど申し上げましたが、いろんな試みをしているところでありますが、いずれにしても、文字を読む、新聞や出版物を読む大切さをいろいろ考えていきたいと思えます。入試の方向の転換のなかで、新聞記事などを読んで意見をまとめる、そういう記述式の問題の導入も検討されていると、うかがっております。それぞれの教育現場で、新聞やその他の活字文化に触れる機会を増やしていただけることを強く期待しています。学校あるいはご家庭で、いろいろな課題について関心を深めていくためにも、自分の頭で考える、そういうことのきっかけになれるように我々新聞も今後努力していきたい。皆様にも、そういった面で関心をもっていただければ、ありがたいと思えます。

きょうは大変盛りだくさんの内容です。最後までよろしくお願いします。